

## 第88回 山口西田讀書會

### 第87回讀書會記録

出席者：佐野、岡田、岡部、桑原、高木、谷、千葉、福田、藤川\*、藤田、藤村、萬納寺、山口、山本（以上、14名） \*記録者

読書範囲：第1編第3章 意志 第3段落中盤～第4段落中盤

「また意志は多く内より目的を以て進行するとい…」～「スピノーザのいった様に知は力である。」  
(岩波文庫版 p. 43 最後の行～p. 47 l. 2)

### 〈論点の整理〉

#### 1. 第3段落前半の議論のまとめ

「意志と知識との区別も単に相対的である」(p. 44 l. 4)

「意志も知識も潜在的或る者の体系的発展と見做すことができる」( // 1. 7)

～質問と検討～

「意志の特徴である苦楽の情、緊張の感も、その程度は弱くとも、知的作用に必ず伴うて居る。」

「知的作用に」という表現は、「知的作用が」とした場合とどのような違いがあるか。

→前者では知的作用が「主体」となり、後者では「副次的要素」となる

cf. 「かつていった様に、」(p.44. 6) →第1編第1章「純粹経験」第5段落 (p.23)

「今なお少しく精細に…」

～「…意識発展の形式は即ち広義において意志発展の形式であり、その統一的傾向とは意志の目的であるといわねばならぬ。」

#### 2. 主観・客観の区別を用いた「相対性」\*の例証 \*意志/知識の区別の相対性

例1：経験的研究における真理探究の方法：仮定（≡主観）から出発し、観察（≡客観）との一致を確認する

例2：意志的動作における実行に移すか否かの判断：意志（≡主観）に対して客観的事実（≡客観）と照らし合わせ、適否かを判断した上で実行に移す。

～検討～「前者において我々は全然主観を客観に従えるが、後者においては客観を主観に従えるということができるであろうか。」→いえない（第4段落 1-2行目参照）。

cf. 真実在の成立する方式→第2編第4章第2段落 (pp. 85-86.)

「独立自全なる真実在の成立する方式を考えて見ると、」

～「やはり先ず目的観念があつてこれより種々の観念聯合を生じ、正当なる観念結合を得た時この作用が完成せられるるのである。」

### 3. 意志と客観の遠さ (=無効) 近さ (=有効)

意志が客観と遠い場合：種々の手段を考え、一步一步進まなければならない (あるいは目的変更する)  
目的 (=意志) が現実 (=客観) と近い場合：飲食起臥の如く、直ぐ実行される  
→客観より働くとも見られる



## 第4段落 [知識的実現と意志的実現の同一性] (p.45 l.r4~)

### 1. 前段落の議論の継承

意志において、客観を主観に従えるといえない 第3段落における例 2=後者  
知識において、主観を客観に従えるといわれぬ 第3段落における例 1=前者 } それぞれ否定

### 2. 統覚作用の一種としての思惟

「思惟も一種の統覚作用」(p.45 l.r1~)、「(思惟も) 知識的要求に基づく内面的意志」

- ・思惟 ⊃ 統覚作用
- ・思惟 ⊃ 意志
- ・「思惟の目的を達する」 ⊃ 「意志実現」

### cf. 統覚作用 → 第3編第1章「行為 上」第4段落 (pp.138-139)

「右に述べたところは…」

～「一つは観念結合の原因が主として外界の事情に存し、意識においては結合の方向が明でなく、受動的と感ぜられるので、これを聯想といい、一つは結合の原因が意識内にあり、結合の方向が明に意識せられて居り、意識が能動的に結合すると感ぜられるので、これを統覚という。」

### 3. [通説としての] 知識と意志の相違点

「一は自己の理想に従うて客観的事実を変更し、」 →意志→ 「作為し」

「一は客観的事実に従うて自己の理想を変更する」 →知識→ 「見出す」

知識に関する補足説明：真理は「作為」する者ではない／真理に従うて思惟すべき者 (=見出す)

→「意志≡作為」 ⇔ 「知識≠作為」 : 偽の対立

### 4. [純粹経験の立場としての]主観と不即不離の真理と客観

- ・真理は主観を全く離れて存在することはできない
- ・主観を離れた客観は存在しない

### 5. 経験的事実の統一的体系としての真理

- ・真理は、私たちの経験的事実を統一したもの
- ・客観的真理は、最も有力で統括的な表象の体系
- ・「真理を知る」、「真理に従う」ということの実態は、自己の経験を統一的に体系化すること
- ・「真理を知る」、「真理に従う」ことによって、「小なる統一」から「大なる統一」へと進む

## 6. 真理と「真正なる自己」

- ・「真正なる自己」は、自己の経験を統一的に体系化する作用そのもの
- ・「真理を知る」＝大なる自己に従う／大なる自己の実現

## 7. ヘーゲルの引用

“凡ての学問の目的は、精神が天地間の万物において己自身を知るにある”

注解 pp.275-276. 『哲学史講義』の結論部分を紹介



## 8. 知識においても能動的である（3. の偽の対立の否定）

個人的要求を中心として考える→知識において所動的である（ように感ぜられる [が実は違う]）

理性的要求を中心として考える→知識においても能動的である（≒意志と同様、作為的）

※意志の実現と知識の実現は同一である

～質問と検討～

「理性的要求」とは何か。→宿題！（生活者の視点を離れ、精神活動の視点で言語化する）

## 9. 知は力（スピノーザ）

知は力＝知識は能動的、作為的

※「力」を何らかの対象に対して「作用」するエネルギーと捉えるならば、知は正に外界に対して作為する精神エネルギーと解釈される

（p.276 に注解あり）

## 10. 哲学の問い

- ・「虫を補食するコウモリ」における、虫の移動経路とコウモリの移動経路
- ・石にも意志がある→エルンスト・ヘッケル、宮沢賢治「青森挽歌」

cf. 第2編第8章「自然」第4段落（p.113）

「自然もやはり一種の自己を具えて居るのである。」

### 〈哲学の問い〉

真理は、私たちの経験的事実を統一したもの（p.461.7 真理とは我々の経験的事実を統一した者である）

- ・「我々の」経験的事実はいかにして統一されるのか。
- ・私の経験的事実が統一される際に、経験的事実の認識が、先行する他者の経験に則して整理されると考えて良いか。
- ・その場合、「全く新たな経験」（というものがあつたとして）、それはどのようにして自己に到来するか。
- ・またこの場合、我々の真理に対して、「彼ら」の真理の存在余地が担保されていると考えて良いか。